

天上の仏国へ 天川村 虻峠

日本国の都城の南百余里、
金峯山あり。
山上に金剛藏王菩薩あり。
第一の霊巖なり。
…智て女人上るを得たること有らず…
〔義経の巻〕

古代、海を越え中国にまで知られていた女人禁制の霊場、大峯山は北に^{おおてんじょうがだけ}大天井ヶ岳、^{おおがたやま}扇形山、^{たかきやま}高城山、東北に^{しょうぶかやま}勝負塚山、東南に^{だいふけんだけ}大普賢岳、^{まうじやかきだけ}行者還岳、南には^{てんわやま}天和山、^{たきやま}滝山、高野辻と千数百メートル級の連綿と続く名だたる高峰に囲まれ、さらに東西南北には厳しい女人結界を定め、下界より隔絶した聖なる霊地として信仰の対象になってきました。

今回の旅は、この大峯山を有する奥吉野の天川村を訪ね、虻峠を越え大峯山へと古代の修験者の足跡を辿ります。そそり立つ峻険に囲まれ修験道の基地として人々の目から神秘のベールに包まれてきた天川村の、奥深く、不思議の国の歴史を垣間見ながら…。



深山幽谷を越え 霊峰、大峯山への道

「此どろ川より
天の川へとをる腹下りとして壺里有」
奈良曝（ざらし）

1687年刊の奈良の案内記、「奈良曝」によるとこのような記述が見られます。洞川は大峯参詣への登山口として開けた地で、天の川とは天河大弁財天



虻峠の役行者尊

社のこと。「腹下り」というのは天川村川合から洞川に越える虻峠と考えられます。現在では下市口から吉野川を越え、一路国道309号線を川合へ。川合から西には、村を横断するその名も美しい天の川に沿って弁財天や本村の集落を巡る大峯街道へと向かいます。東への道は虻峠の下をくぐる虻トンネルを越えて洞川へと至ります。

さて、虻峠の名前の由来は明確ではありませんが、この峠は虻が多く、峠より向うへは虻が越えないということから通称として呼ばれるようになりました。本来は鈴懸峠（すずかけがし）といいます。いずれにせよ、この小さな虻峠は奥吉野の深山幽谷の涯にあ



洞川を望む



虻トンネル

る霊場を求めて、ようやく大和の秘境、天上に一番近い村に辿り着いた古代の修験者や都の人々にとって、現世から浄土に渡る峠であったにちがいません。



案内板には
蛇峠の由来が記されている

大峯開山の祖、役小角行者

～龍泉寺からお山へ～

大峯山系は大峯山（山上ヶ岳）を中核として75座という大規模な連峰より成り、役小角行者が開いた修験道発祥の霊場とされています。いにしえの昔より神仏が宿る霊地として信仰を受け、都人や僧侶たちにとって憧れの浄土でもありました。修験道は山岳信仰に仏教が習合し、中国の民族宗教である道教が加味され成立したのですが、その特徴は女性を修行の障壁とみなし、戒律により

行場より排除していることです。大峯への山道には厳しい女人結界が決められ、これより先は男のみの修験の世界であるという神聖な王国として1300年にわたって女性の登山を禁じているのです。蛇峠から洞川温泉郷へ入り、昔の



大峯山系



日本岩

行者の足跡を偲んでみましょう。

修験道の根本道場として全国の信者が集まる龍泉寺は、役小角行者がここで泉を発見、八大龍王を祀り水の行をしたのが始まりとされています。現在でも山上参りの人々はこの竜の口から出る清水で体を清めてからお山に入ります。またカルスト地形の洞川には多数の洞穴があり、特に不動、五代松の鍾乳洞は県の天然記念物指定です。この石灰岩の地層に磨かれた洞川湧水＝ごろごろ水は古来から万病に効く霊力を持つとされ大切にされてきました。



龍泉寺の湧水

女人結界、母公堂の言い伝え



母公堂

昔、役小角行者が大峯山に籠り日夜修行に励んでいた時のこと、行者の母君と行者の仏弟子がはるばる尋ねてきました。二人が里から半里ほどある谷にさしかかったところ、大蛇が道にトグロを巻いて行く手をさえぎります。二人は谷を渡ることをあきらめ、大峯山に向かって行者の無事を祈ると一条の光の中から阿彌陀如来が現れ、「私の化身になって衆生を救おうと一心に練行している小角の修行を妨げてはならない。修行が終わるまで山に入ってはいけない」と告げたのです。母君はあの大蛇は八大龍王の化身であったと思い、この谷の岸に庵をつくって行者の下山を待ったといわれます。谷は蛇ヶ谷と呼ばれ女人禁制の結界と定められました。庵跡は母公堂と呼ばれ、安産祈禱所として古くから女人たちの線香が絶えることはないということです。

しかし最近では女性解禁へ向けて、伝統の改正も論議されています。

音楽と并舌の神様 天河大弁財天社

蛇峠から川合に戻り西へ、天の川沿いの坪内に天河大弁財天社があります。役小角行者が大峯山の修験道場を開き、山上ヶ岳において国家鎮護の神を祈誓した時、第一に出現したのが弁財天であったが、女神であるためこれを天川に祀り、第二に出現した蔵王権現を山上ヶ岳の本尊として祀ったといわれています。

また、弘法大師が高野山開山の前、ここを根拠として1000日の大峯修行をしたと伝えられ、天河社には弘法大師にまつわる逸品が1200年の時を越えて遺されています。修験道においてはわが国の四弁天（天河、竹生島、江の島、厳島）の中で第一に位すると考えられていたようです。

天河弁財天は別名妙音弁才天といい、音楽と并舌の神であり、現在でも芸能の神さまとして芸能人のお参りに来る古社です。能楽にゆかり深い社

で、南北朝以来の能面や能装束の収蔵で知られています。中でも1430年、世阿弥の子、観世十郎元雅が所願成就を願って弁財天に詣で奉納した阿古父尉面は著名です。將軍足利義満の寵愛を受けた世阿弥は、義満の死後うとんじられ佐渡に流され、元雅も天川に能面を寄進した後、京の晴れ舞台に返り咲きたいという悲願も空しく頼っていった伊勢の地で客死してしまいます。世阿弥父子の悲しい末路に関わらず、その後、大和に猿楽座が生まれ、能狂言が盛んになってきます。弁財天の神徳かもしれません。



天河大弁財天社・社殿



拝殿

南朝の悲運を見つめた蛇峠

…武蔵守師直ハ、三万余騎ノ勢ヲ辛シテ、
吉野ノ麓へ押寄スル…
今夜急ギ、天河ノ奥穴太ノ辺へ
御忍ビ候フベシ…

（太平記）

1348年正月、南朝の頼朝高師直は大軍を率いて吉野進軍を遂行。急を聞いた後村上天皇は吉野の側に落ちていきます。さらに「女院、皇后、内親王、宮々一房宮に至るまで取るものも取りあえず、慌て騒ぎ、倒れ落ちて吉野の奥へ逃げ入る」と、敗走の描写が生々しく記されています。ここに見る天河の奥穴太「アブト」とは蛇峠辺りであろうと推察されます。

天河大弁財天には南朝の天皇の編纂、令旨が現存しており、天川郷と南朝との深い関わりをうかがうことができます。足利尊氏の反乱により後醍醐天皇が吉野に潜幸して以来半世紀余、京都回復も叶わず、奥吉野の山奥を転々とした南朝の天子たちの悲運が偲ばれます。

大事や天ノ川原に年をへて

またくる春に花を見るらむ

漂白の壁。門空が詠んだように天川村は、霊山に抱かれた神秘的で美しい自然郷としてのたたずまいを今も見せています。キャンプやハイキング、スキーなどアウトドアスポーツや温泉を楽しむ人で賑わいますが、歴史の深層に響かに受け継がれている神仏への信仰の伝統に何か忘れていたものを感じずにはいられません。